

第3回旧吉田茂邸活用検討会議資料

平成19年1月25日

大磯町企画室

七賢堂及び銅像の取り扱いについて 資料1

町の諸施策について 資料2

歴史的建造物保存活用先進事例視察資料 資料3

(H19 年 1 月時点：検討段階)

七賢堂及び銅像の取扱いについて（案）

七賢堂及び銅像は旧吉田茂邸の活用を図る際の貴重な資源であるが、都市公園施設として行政(町・県)が所有・管理するには法的解釈等に留意する必要がある。

○法的解釈（県顧問弁護士との相談結果）

◇七賢堂は個人崇拝的・宗教的施設と見えることから、都市公園施設とすることは出来ない。（七賢堂で行われる七賢祭も同様の考え）

【根拠】

○憲法第 20 条：信教の自由と政教分離原則

3 国及びその機関は、宗教教育その他いかなる宗教的活動もしてはならない。

○憲法 89 条：公の財産の支出利用の制限

公金その他の公の財産は、宗教上の組織若しくは団体の使用、便益若しくは維持のため、又は公の支配に属しない慈善、教育若しくは博愛の事業に対し、これを支出し、又はその利用に供してはならない。

◇吉田茂銅像は現段階では都市公園施設になじみ難い（公園として所有・管理は困難）

【根拠】

○都市公園法施行令 第五条（公園施設の種類）の運用解説

修景施設（彫像）たり得る条件に該当しない（個人崇拝施設と見なされる）可能性がある。

施行令 第五条（公園施設の種類）

修景施設の彫像としての位置づけが考えられるが、特定の人物を形象化した彫像が、一般に都市公園の効用を全うする修景施設たりうると認められるのは、以下のとおり。

※都市公園法解説より

当該人物が高度に精神化され又は広く伝説化された存在であり、かつ、当該彫像が相当程度の芸術的価値ないしは美的価値を有するものであって、来園者の審美の対象となりうるもの。

→吉田茂氏は現段階では「高度に精神化」または「広く伝説化」された歴史上の人物とは言い切れないにもかかわらず、七賢堂に祀られていることは、個人崇拝的であるとも受け取れる。

町の諸施策について

1. 旧吉田茂邸維持管理負担軽減措置について

(1) 経過概要

・旧吉田茂邸の維持管理には、固定資産税約 2,500 万円を含め年間約 5,000 万円程度の直接経費がかかっています（西武鉄道㈱調べ）。このため、昨年来所有者より町に対し、売却するまでの維持管理支援として固定資産税減免等の要望が出されてきました。このため、町では支援プロジェクトを立ち上げ、関係機関とも調整しながら支援策を検討しました。

(2) 検討結果

- ・税の減免措置は税法上困難（※文化財等の指定が必要）
- ・代替措置として町が敷地を有償借上（※建物、河川及び道路部分を除く）

(3) 具体的な措置案

- ・借地期間 平成 19 年 4 月 1 日～平成 20 年 3 月 31 日
（※神奈川県に譲渡されるまでの間更新予定）
- ・借地料 近隣の川尻公園借地料単価を参考に、庭園管理費等を考慮した金額で西武と調整中。（※固定資産税額の 1/2 強程度の見込みで、平成 19 年度当初予算案に計上）

2. 旧吉田茂邸の暫定利活用について

(1) 経緯

- ・ 昨年 3 回（計 8 日間）実施した一般公開には、県内外から約 32,500 人もの応募を頂くなど関心は高く、現在も問い合わせが連日寄せられています。
- ・ 神奈川県による都市公園としての供用開始には、諸手続きや整備等により数年を要する見込みであるため、町が有償借地をしている間、庭園部分の一般公開等、暫定的な利活用について検討します。

(2) 課題

- ・ 庭園は一般公開を前提とした整備がされていないため、来場者の安全性確保や庭園保全に対する懸念があります。
- ・ 同様に、本宅や内門、七賢堂等重要建造物への損壊行為に対する危険性もあります。
- ・ 一般公開経費が 1 日当たり概算で 5～7 万円程度見込まれるため、公開目的を明確にし、費用効果を十分に見極める必要があります。

(3) 利活用案（現時点での考え方）

- ・ 実施機関 民間等への委託を想定
- ・ 公開日 9 月より週 2 日（土日）程度の公開を想定
- ・ 公開要領 施設の保全及び入場者の安全確保のため、1 日あたりの定員を設定し、時間指定の完全予約制とします。
- ・ その他 各種団体等の要望、協力等が得られれば、行楽シーズン等に特別イベントの開催も検討します。

歴史的建造物保存活用先進事例視察資料

1 鎌倉文学館（鎌倉市） <http://www.kamakurabungaku.com/>

旧前田侯爵家の鎌倉別邸として昭和初期に建てられた貴重な洋風建築物。戦後デンマーク公使や佐藤栄作元総理が別荘として借用していたが 1983 年（昭和 58 年）、鎌倉市へ寄贈される。1985 年（昭和 60 年）に文学館として開館。建物は昭和初期の洋風建築。鎌倉市芸術文化振興財団により運営。鎌倉市長谷 1-5-3 入場料 400 円。月曜日休館。

2 山口蓬春記念館（葉山町） <http://www.jrtf.com/hoshun/>

日本画家山口蓬春は、古典による伝統的日本画を探求する一方で、西洋画の技法を取り入れる等、独自の新日本画の世界を築いた。当記念館は、遺族より土地・建物及び所蔵の美術品を遺贈された（財）ジェイアール東海生涯学習財団が、蓬春の偉業を永く後世に伝えることを目的として、1991 年（平成 3 年）に開館。山を背に葉山の海を臨む風光明媚な場所に立地する記念館。蓬春の作品やコレクションを展示する他、著名な日本建築家である故・吉田五十八氏設計のアトリエ、四季の趣豊かな庭園を公開。入場料 企画展 400 円 特別展 500 円。月曜日休館。葉山町一色 2320 県立美術館北側。



<以下、各施設の公式ホームページより>

○鎌倉文学館

当館の歴史

鎌倉文学館の本館と広大な敷地は、加賀百万石の藩主で知られる前田利家の系譜、旧前田侯爵家の別邸でした。昭和 60 年、鎌倉文学館は鎌倉ゆかりの文学者の著書・原稿・愛用品などの文学資料を収集保存し、展示することを目的として開館しました。

I 前田侯爵家別邸の歴史

「聴涛（ちょうとう）山荘」と「長楽山荘」

前田家の別邸は、明治 23 年頃、第 15 代当主の前田利嗣氏が土地を手に入れ、和風建築の館を建てたことにはじまります。この館は明治 25 年、「涛(なみ)」を「聴」く「聴涛山荘」と命名されました。明治 43 年、「聴涛山荘」は類焼により焼失し、洋風に再建されます。大正 12 年、関東大震災で倒壊し、後に建て直されます。新しい別邸は、鎌倉時代、長楽寺があったことから「長楽山荘」と名付けられました。さらに、第 16 代当主の前田利為氏が改築し、昭和 11 年、今に残る洋館が完成します。

デンマーク公使と佐藤栄作首相

第二次世界大戦後、デンマーク公使や佐藤栄作元首相が別邸を借り、別荘として使用していたこともあります。佐藤氏は別邸の近くに住んでいた川端康成と交流を深めました。その時代に、鎌倉文士の小林秀雄や永井龍男もここを訪れています。

さらに、三島由紀夫は執筆のために別邸を取材し、小説「春の雪」にこのように描きました。

「青葉に包まれた迂路を登りつくしたところに、別荘の大きな石組みの門があらわれる。(中略) 先代が建てた茅(かや)葺(ぶ)きの家は数年前に焼亡し、現侯爵はただちにそのあとへ和洋折衷の、十二の客室のある邸を建て、テラスから南へひらく庭全体を西洋風の庭園に改めた。」

「春の雪」より 『決定版三島由紀夫全集』13 新潮社

II 鎌倉文学館の設立について

鎌倉文学史話会と文学館建設懇話会

昭和 50 年、鎌倉市内の有志により、鎌倉の文学を研究する「鎌倉文学史話会」が発足。史話会は、文学館を設立のため、様々な活動を行いました。昭和 56 年、鎌倉市は文学館の建設の検討をはじめ、作家の里見弴や、今日出海、小林秀雄、永井龍男、清水基吉らによる「文学館建設懇話会」を発足させます。昭和 58 年、旧前田侯爵家別邸が鎌倉市へ寄贈され、文学館として利用されることが決定しました。

鎌倉文学館開館

昭和 60 年 10 月 31 日、鎌倉文学館開館記念式典が行なわれました。初代館長の永井龍男は、「文学、文学と肩ひじをはらずに来ていただいて、興味をひいたら、ついでに展示物を見ていただき、研究という大げさだが、文学というものをご自分の生活に消化して身につける。これが文学の味わいの根本だと思う。」とあいさつしました。11 月 1 日、鎌倉文学館は、一般公開されました。現在、多くの文学資料を収蔵し、常設展や、企画展をはじめ様々な活動を行っています。

○山口蓬春記念館

沿革と概要

昭和 46 年 5 月 31 日、日本画家山口蓬春は晩年を過ごしたこの葉山の地で 77 年の生涯を閉じました。平成 2 年、山口家より土地、建物及び所蔵作品の寄贈を受けた財団法人 J R 東海生涯学習財団では、その偉業を永く後世に伝えていくことを目的として、平成 3 年 10 月 15 日、山口蓬春記念館を開館致しました。

当記念館では、蓬春の本画をはじめ、研鑽の偲ばれる素描、模写などを公開しております。その他にも、常に古今東西の美術に対する理解、研究を怠ることのなかった蓬春が、長年にわたり収集した美術品の数々も、随時展示替えを行いながらあわせてご覧頂いております。

また、葉山に転居して以来、数々の名作を生みだした画室は、蓬春とは東京美術学校（現・東京藝術大学）で同窓であった建築家・吉田五十八氏による設計です。当時のままの状態でも保存し、四季折々の草木が楽しめる庭とともに公開しております。また、平成 13 年 10 月 15 日には、蓬春が昭和 28 年まで画室としていた二階座敷を一般公開致しました。

来館された方々には、蓬春の生前の創作活動を偲びながら、海と山に囲まれた葉山の豊かな自然を満喫していただけるものと思います。

山口蓬春の歩み

山口蓬春（本名・山口三郎）は、明治 26 年 10 月 15 日北海道に生まれました。父親の勤務に伴い明治 33 年に上京、中学校在学中には白馬会研究所で洋画を学びました。

大正 3 年東京美術学校（現・東京藝術大学）西洋学科に入学後してからは、二科会において 2 度の入選を果たしますが、大正 7 年に日本画科に転科し、大正 12 年には首席で卒業しました。

9 年間の学生生活を終えた蓬春は、師である松岡映丘が主宰する新興大和絵会に参加し、大正 15 年第 7 回帝展に出品した《三熊野的那智の御山》では、帝展特選、帝国美術院賞を受賞するとともに宮内庁買い上げとなり、画壇への華々しいデビューを飾ります。

しかし、新しい日本画の創造を目指した蓬春は、映丘と袂を分かち、帝展とも離れる試練の時期を迎えます。一方で、昭和 5 年福田平八郎、中村岳陵、木村荘八、中川紀元、牧野虎雄、横川毅一郎、外狩顕章らと六潮会（りくちょうかい）を結成。日本画家、洋画家、美術評論家からなる流派を超えた交流のなかで、独自の絵画領域を広げていきます。《市場》などの戦前の代表作をこの時期生み出しました。戦後は、新日本画への姿勢がより一層明確に打ち出され、ブラックやマティスなどフランス近代絵画の解釈を取り入れた知的でモダンなスタイルを確立します。《夏の印象》など明るく洗練された作品を発表し、日展を中心に活躍していきました。

その後、《枇杷》などの緊張感に満ちた写実表現を経て、《紫陽花》などの清澄で格調ある表現へと画境を展開していきます。そして、代表作《春》《夏》《秋》《冬》を発表、昭和 40 年には文化勲章を受章しました。また晩年には、集大成ともいえる皇居新宮殿の杉戸絵《楓》を完成させました。

現状に甘んじることなく、常に新しい日本画の創造を模索し続けた蓬春は、多くの業績を残し昭和 46 年 5 月 31 日、77 歳の生涯を閉じました。